

# 小学校社会科まちづくり学習における シビックプライドの醸成に関する事例的研究

—遠隔協調学習を用いた実践と検証—

片桐 広太\*・榊原 範久\*\*

(令和5年8月31日受付；令和5年10月31日受理)

## 要 旨

昨今の教育現場では、地域の活性化を図るために地域資源・課題を生かした授業実践が求められている。そのためには身近な地域の魅力や課題を自分事として捉えさせ、地域に愛着をもつシビックプライドの醸成が必要不可欠である。そこで本研究では、小学校社会科のまちづくり学習及び遠隔協調学習に着目した。小学校社会科まちづくり学習において遠隔協調学習を用いた単元開発と授業実践を行い、遠隔協調学習がシビックプライドの醸成に与える効果を検証した。その結果、シビックプライドの第1因子である愛着と第2因子のアイデンティティが表出し、遠隔協調学習がシビックプライドの醸成に有効性があることが明らかとなった。

## KEY WORDS

まちづくり学習, シビックプライド, 遠隔協調学習, 小学校社会科, 同期型CSCL

## 1 はじめに

### 1.1 小学校社会科におけるまちづくり学習

我が国の地方の人口減少の最大の要因は、若者の大都市への流出である(日本創成会議・人口減少問題検討分科会, 2014)<sup>(1)</sup>。教育現場では、中央教育審議会(2015)<sup>(2)</sup>が「学校を核とした地域づくり」の推進の重要性を示している。加えて、社会に開かれた教育課程の実現のため、地域資源や地域課題を生かした授業実践が求められている(中央教育審議会, 2021)<sup>(3)</sup>。また、大西(2022)<sup>(4)</sup>は「持続可能な社会を考える場合、地域を学ぶことは、地域の抱えている課題を学ぶことになる」とし、地誌学習としてのふるさと学習の意義を述べている。これらのことから、初等教育段階から身近な地域の魅力や課題を自分事として捉えさせ、地域に愛着をもつ子どもの育成が求められている。

小学校学習指導要領解説社会編において、第4学年の内容に「まちづくり」という語句が記載され、その重要性が再認識されている(文部科学省, 2017)<sup>(5)</sup>。まちづくり学習に関する定義は広義である。竹内(2004)<sup>(6)</sup>は、まちづくり学習を「さまざまな体験を通して子どもたちが自分たちの生活する地域を知り、地域の良さや問題点を見いだし、地域の形成者の一人として主体的にまちづくりにかかわっていこうとする態度を培うことを目指す学習」と定義している。一方、寺本(2012)<sup>(7)</sup>は、まちづくり学習を「『まち』を意識させる学習」としている。これらを踏まえて、本研究では、まちづくり学習を「まちを意識したさまざまな体験を通して、子どもたちが自分たちの生活する地域を知り、地域の良さや問題点を見いだし、地域の形成者の一人として主体的にまちづくりにかかわっていこうとする態度を培うことを目指す学習」と定義する。

社会科におけるまちづくり学習の先行研究は多く見られる。竹内(2004)<sup>(8)</sup>は、まちづくり学習を実践する際に、地域問題を教材として取り上げる必要性とその視点を明らかにし、具体的な実践例を通してその可能性を考察した。太田(2018)<sup>(9)</sup>は人口減少社会に対応するまちづくり学習の在り方として、人口減少に対してまちはどう対応し、地域を創造するかという観点から授業開発と実践を行った。その結果、「社会的課題の解決に向けて行動し、他者や自分の考えの背後にある価値に気づき調整しながら、他者と共に共生社会や地域の未来をつくる資質・能力」を育成する必要があるとしている。一方、まちづくり学習の課題と展望として、吉水ら(2019)<sup>(10)</sup>は、①まちづくり学習における「未来」という視点の必要性、②自分たちの住むまちの未来をどのように考えさせるかの2点を挙げている。また、大西(2019)<sup>(11)</sup>は「まちづくり」を「これからの地域社会を創り出す取り組み」としている。加えて、長瀬(2021)<sup>(12)</sup>は、まちづくりの視点を取り入れた社会の単元モデルである「まちづくり的社会科」を提唱、実践し、その効果を検証した。その結果、自分たちのまちをテーマにすることで、子どもがより切実さをもって学習に迫ることができると

\*上越教育大学教職大学院(専門職学位課程) \*\*学校教育学系

している。以上のことから、小学校社会科におけるまちづくり学習の重要性は高いと考える。

### 1. 2 求められるシビックプライド

昨今、地域社会の問題解決においては、シビックプライド(civic pride)という概念が広がりつつある。シビックプライドとは、「市民が都市に対してもつ誇りや愛着」のことである(伊藤・紫牟田, 2008)<sup>(13)</sup>。伊藤・紫牟田(2008)<sup>(14)</sup>は「日本語の郷土愛とは少々ニュアンスが異なり、自分はこの都市を構成する一員でここをより良い場所にするために関わっているという意識を伴う。つまり、ある種の当事者意識に基づく自負心」と定義している。これを踏まえ、田中・堀尾(2016)<sup>(15)</sup>は「市民が地域社会に対してもつ自負と愛着、またその向上に対して積極的に参加する姿勢」と定義している。また、伊藤(2017)<sup>(16)</sup>は4つの因子(①愛着、②アイデンティティ、③持続願望、④参画)からなるシビックプライド尺度を開発した。本研究ではこれらの定義を踏まえ、論を進めていく。

小学校社会科におけるシビックプライドの醸成を目指した先行研究はいくつか見られる。田中・堀尾(2016)<sup>(17)</sup>は、まち歩きを基盤とした地域学習プログラムがシビックプライドの涵養に関して果たした役割について考察した。その結果、児童がクラスメイトとともにグループ学習を行って理解していく過程がシビックプライドの涵養に効果的であるとされた。井形・田中(2019)<sup>(18)</sup>は地域学習に用いた教材を使い得られた児童の成果物と、1年間の地域学習を通じた児童の意識変化に着目して実践を行った。その結果、児童の地域への認識の整理をしたり、地域に対する思いの変化を読み取ったりすることで、シビックプライドの形成過程を明らかにできるということを示した。一方、山田(2020)<sup>(19)</sup>はシビックプライドについて、「社会科教育が育成を目指している社会参画の意識や主権者教育と重なる部分が多い」と述べている。また、唐木(2016)<sup>(20)</sup>は社会科の目標である公民的資質を「人とつながり、社会とつながって、望ましい未来を創り上げる力」とし、今後の社会科授業には社会参画の視点が必要不可欠だとしている。以上のことから、子どもたちのシビックプライドの醸成と社会科教育は親和性が高いと考える。

### 1. 3 遠隔協調学習の実践

文部科学省(2018)<sup>(21)</sup>は遠隔教育を推進しており、発表や互いの地域の特徴や共通点・相違点の伝え合い等による教育効果を期待している。一方、新井ら(2021)<sup>(22)</sup>は「教室間を繋ぐだけでは、一斉授業を相互に接続するだけであり、協働的な学びを実現することは難しい」と述べている。そこで、本研究ではクラウド上で稼働する同期型CSCLシステムのアプリケーション「edutab」と「edulog」(八代ら, 2019)<sup>(23)</sup>を活用した遠隔協調学習に着目する。遠隔協調学習とは、「遠隔の学習者が持つタブレット端末を相互に接続し、それぞれの内容を閲覧することができる学習」である(八代ら, 2019)<sup>(24)</sup>。

辻ら(2022)<sup>(25)</sup>は、総合的な学習の時間における同期型CSCLを活用した遠隔協調学習を通じた学習者の探究のプロセスに与える効果の検証を行い、「まとめ・表現」の活動に効果があることを明らかにした。一方、遠隔協調学習の課題として、八代ら(2019)<sup>(26)</sup>はより多くの授業実践を積み重ねること、及びその運用方法を具体化していくことを挙げている。また、新井ら(2021)<sup>(27)</sup>は他教科を含めたより広範な領域において、多様な考えに触れることや協働的に学ぶことが可能となるか検証することを挙げている。

しかし、小学校社会科まちづくり学習において、遠隔協調学習に焦点化し、シビックプライドの醸成に関する効果を明らかにした研究は管見の限りない。そのため、小学校社会科まちづくり学習において、遠隔協調学習を用いたシビックプライドを醸成する単元開発・授業実践をし、その有効性を検証していくことには意義があると考えられる。

## 2 研究の目的

小学校社会科まちづくり学習において、遠隔協調学習を用いた単元開発と授業実践を行う。遠隔協調学習がシビックプライドの醸成に与える効果について検証し、その有効性を明らかにすることを目的とする。

## 3 研究の方法

### 3. 1 調査の概要

#### 3. 1. 1 調査時期

令和4年10月

### 3. 1. 2 調査対象

学習者：新潟県S市立X小学校(以下、X小)3年生35名

接続先：新潟県T市立Y小学校(以下、Y小)3年生31名

本研究では、授業者がX小の教員(教職経験10年以上の中学校社会科免許を有する小学校教員)がT1として主導し、授業を進行した。なお、研究対象の2時間全ての授業に出席した学習者66名のみを対象とした。X小は県内有数の豪雪地帯であるS市に位置し、学校の周辺には工場が散在している。Y小は県内の平野部で洋食器の製造が盛んな地域であるT市に位置し、学校の周辺には水田が広がっている。なお、遠隔協調学習については、両校の学習者ともに初めて経験する学習である。普段の学習におけるタブレット端末の使用状況は、X小の学習者はカメラ機能、インターネット検索機能を使用しており、タイピングによる文字入力の実験はほとんどない。一方、Y小の学習者はカメラ機能やインターネット検索機能に加え、タイピングによる文字入力、インターネットで検索した画像を保存したり、取り出したりできるアプリケーションを使用した経験がある。

### 3. 1. 3 調査単元

教科：小学校第3学年社会科 単元：農家の仕事

### 3. 1. 4 記録方法

- ・ビデオカメラ1台を教室後方に設置して記録
- ・ICレコーダー2台(教室前方、教室後方)を用いて話し合い活動の発話を記録
- ・学習者のタブレット端末の画面をスクリーンショットし、クラウド上にて記録
- ・教師用タブレット端末を画面録画して記録

### 3. 2 遠隔協調学習の実践の流れ

本研究の授業展開は、次頁表1のとおりである。遠隔協調学習の実践は、単元のまとめの学習として8・9時間目に実施した。文部科学省(2017)<sup>(28)</sup>は「対話的な学び」の実現について、「学習過程を通じた様々な場面で児童相互の話し合いや討論などの活動を一層充実させることが求められる」としている。加えて、「主体的・対話的な学び」の過程で「ICTを活用することも効果的である」としている<sup>(29)</sup>。以上のことから、遠隔協調学習を取り入れることは対話的な学びに効果があると考えられる。なお、遠隔協調学習を行う1週間前にX小とY小で接続テストを実施し、edutabやedulogの使い方を確認している。8時間目の活動は、始めにX小の学習者がこれまでに学習した地域の特産品である農産物について、Y小の学習者にWeb会議システムを通じて紹介する。Y小の学習者は発表を聞いた後、edutab上で質問をする。edutabは課題を一齐にタブレット画面に提示し、自分の意見を記入することができる(図1)。記入した内容はedulogを活用することで端末に記録され、学習者ごとの学習記録を閲覧することができる(図2)。図2のようにedulogでは、自己、自校の学習記録や相手校の学習記録を同時に閲覧することができる。このように、空間が離れていても互いの学習状況がリアルタイムで可視化、共有することができるため、本研究ではedutabとedulogを活用する。Y小の質問の中から、T1がどの質問に答

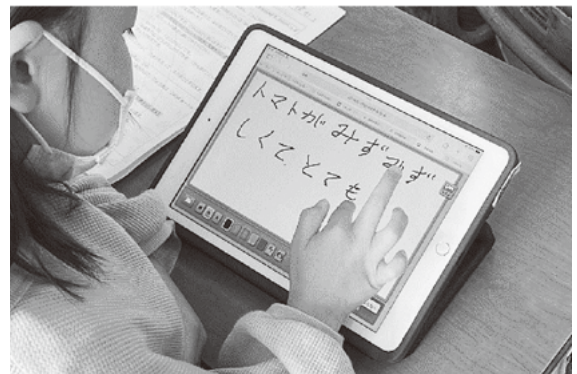


図1 edutabの画面の様子

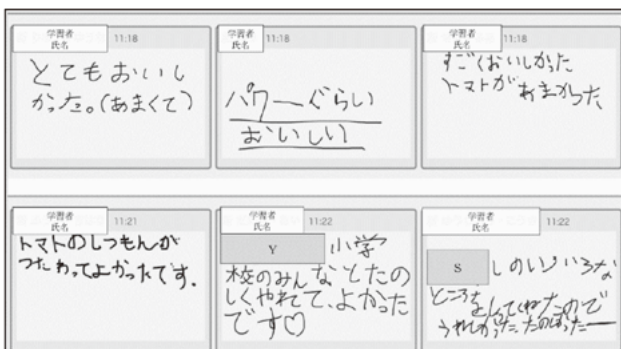


図2 edulogの画面の様子



図3 遠隔協調学習時の様子



えるかを選択, 決定する。そして, X小の学習者は質問の答えをedutab上で記入する。大型モニターに全員の回答が可視化され, 双方の学習者はリアルタイムで共有することができる(図3)。終末で感想をedutabに記し, 共有する。9時間目の活動は, X小とY小で役割を交代し, 8時間目と同様に行く。ただし, Y小は地域の宝物を発表するものとする。なお, 本研究で用いるタブレット端末は, edutabの分割画面の関係により2人で1つの端末を使用した。

表1 単元の流れと授業展開

時	学習内容	時間(分)
1	①質問紙調査(事前)	15
	②通常の授業	30
2	①校外学習(直売センターの見学)	45
3~7	①通常の授業	45
8・9	①アイスブレイク	5
	②学習目標の確認, 課題提示	5
	③発表	10
	④感想をedutabに記述	10
	⑤質疑・応答	8
	⑥感想を伝え合う	7

※8時間目はX小からY小への発表, 9時間目はY小からX小への発表

※9時間目の終了後, 質問紙調査(事後)を実施

### 3. 3 分析方法

ア 遠隔協調学習時のプロトコル分析

イ ワークシートのアンケートと振り返り記述分析

ウ インタビュー調査

イのワークシートのアンケート項目は, 伊藤(2017)<sup>(30)</sup>のシビックプライド尺度を基に筆者が独自に3問作成した。アンケートの反応形式は「5:とてもそう思う」から「1:まったくそう思わない」までの5件法で回答を求めた。振り返り記述は, 8・9時間目の遠隔協調学習を終えての自由記述である。X小は9時間目の終末に, Y小は9時間目終了後に記述した。

ウのインタビュー調査では, 半構造化インタビューを用いて遠隔協調学習による学習者の変容を質的に分析する。本分析では, 下記の指標に基づき抽出学習者を選定した。シビックプライド尺度の事前・事後の平均得点を算出し, 両校の学習者を統合して得点順に上位群と下位群の2つに分類した。その後, 各群から1名を無作為抽出し, インタビューを行った。なお, 上位群から抽出した学習者を学習者A, 下位群から抽出した学習者を学習者Bとする。

## 4 結果と考察

### 4. 1 遠隔協調学習時のプロトコル分析

#### 4. 1. 1 8時間目(X小→Y小への発表)

遠隔協調学習を用いることで学習者はどのようなシビックプライドの醸成を辿るのか検証する。次頁表2に8時間目のX小の発表終了後のプロトコルを示す。なお, 下線①の様子を図4に示す。edulogを閲覧することにより, X小の学習者は自分たちが発表した地域の特産品に対してY小からどのような質問が出たのかを個々に確認することができる。同時に, Y小の学習者もedulogを閲覧することで, X小の学習者の回答を閲覧することができるため, リアルタイムでのやりとりが可能となる。



図4 8時間目の活動の様子

表2 8時間目のプロトコル

※XC：X小の学習者 T1：X小の授業者 T2：Y小の授業者  
 ※( )内の記述は筆者による補足説明  
 (前略)

T1 ジャあ、ここからは質問タイムにしたいと思っています。X小の3年生の皆さんは、Y小学校から質問が来ると思うので、ちょっと待っていてください。(マイクに向かって) Y小3年生のみなさん、今の発表を聞いて、何か質問があったら、edutabに書いてみてください。相談タイムを取っていいです。

XC1 (Y小へ発表したことに対して) やってよかったー！  
 (中略)

T1 edulog見ると、さっきedulogを見ると、質問が出ています。edulog。皆さんもちょっと見てください。  
 (①X小の学習者はタブレット端末でedulogを閲覧。)  
 (中略)

T1 先生がちょっと質問を選びますので、それに対して答えを書いてください。OK？

XC2 どこに書くの？

T1 edutabに書いてね。Y小学校の皆さん、聞こえていますか。先生が皆さんから出た質問を選んで、X小学校3年生の皆さんに答えてもらうので、edutabでちょっとそれを見ていてください。  
 (中略)

T1 (Y小の学習者)さんの質問にいきます。高原トマトは給食に出たことはあるんですか？  
 (X小の学習者は2人1組で相談しながら、質問に対する答えをedutabに記入。)

T2 (Y小の学習者)さんの質問です。高原トマトは給食に出たことはあるんですか。その答えは…。  
 (X小の児童は全員が「ある」と回答。)  
 (Y小の学習者はX小の学習者からの返答をedutabで確認。)  
 (中略)

T1 (Y小の学習者)さんの(「高原トマトを使ったピザは、どれくらいおいしいですか?」という)質問に答えます。プラス、先生からも付け足していい? トマトのおいしさはどんな感じだったですか? それも言葉で書いてください。  
 (X小の学習者は2人1組で相談しながら、質問に対する答えをedutabに記入。)  
 (中略)

T1 ジャあ、最後です。もう時間が来てしまったんだけど、今日の感想をお互いに書いて終わりにしたいと思います。Y小の皆さんも、(edutabを)一旦全部消して、今日の感想を書いてください。よろしいですか? こちらのX小の皆さんも全部消して、今日の感想を書きます。  
 (②X小、Y小の学習者は2人1組で相談しながら、活動の感想をedutabに記入。)  
 (後略)

下線②におけるX小の学習者C・Dのedutab画面を図5に示す。学習者C・Dは、「③Y小学校3年生のみなさんに、Sしのみみつをつたえられてうれしかった。④しつ問にたくさんこたえられたのでうれしかった。」と記述している(図5)。下線③から、学習者C・Dは自分たちの市の特産品を相手に伝えたことにより満足感を得ていることが分かる。これより、シビックプライドの第2因子アイデンティティが表出したと推察される。また、edutabを用いて相手校からの質問に回答するやりとりを通して、満足感を得ていることが分かる(下線④)。よって、対話的な学びにおける遠隔協調学習の有効性が推察される。

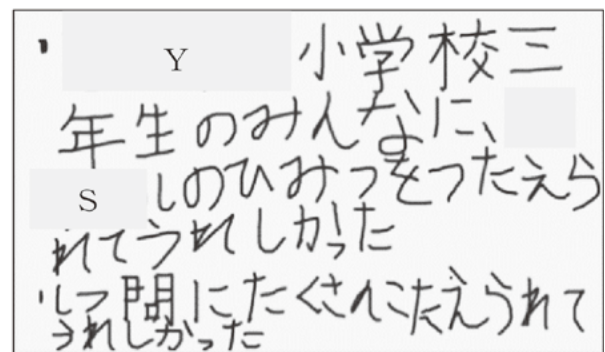


図5 学習者C・Dのedutab画面

4. 1. 2 9時間目(Y小→X小への発表)

次頁表3に9時間目のY小の発表終了後の活動時のプロトコルを示す。下線⑤で、X小学習者が自分たちの質問に対するY小からの回答を心待ちにしている様子が見られる。その直後、X小の学習者がedutabに表示されたY小からの回答を閲覧し、驚嘆している様子が見られる(下線⑥⑦)。edutabやedulogを通してリアルタイムで相互にやり取りを行い、対話的な学習に取り組む様子が見られた。よって、対話的な学びにおける遠隔協調学習の有効性が推察される。

以上をまとめると、遠隔協調学習によって、学習者のシビックプライドの第2因子アイデンティティの表出が推察される。また、対話的な学びにおける遠隔協調学習の有効性が推察される。

表3 9時間目のプロトコル

※XC：X小の学習者 T1：X小の授業者 T2：Y小の授業者

※( )内の記述は筆者による補足説明

(Y小は地域の宝物として、校区内に落ちた隕石の話を紹介する。)  
(前略)

T1 ジャあ、これから質問タイムにしたいと思います。えーと、今のY小学校の発表を聞いて、X小の皆さんはどういう質問をもちましたか。ちょっと相談をして、書き始めてください。

(X小の学習者は2人1組で相談しながら、質問をedutabに記入。)  
(中略)

T1 (X小の学習者)さんと(X小の学習者)さんの質問にしたいと思います。

(質問：「隕石が落ちたのは今から何年前ですか」)  
(中略)

T1 Y小のみなさん、分かるでしょうか？じゃあ、答えをedutabに書いてみてください。

(Y小の学習者は2人1組で相談しながら、質問に対する答えをedutabに記入。)

XC3 ⑤何年前ぐらいだろうね？

(X小の学習者はY小の学習者からの返答をedutabで確認。)

XC4 ⑥(edutabの表示を見て)えー！？まじ？

XC5 ⑦185年前？

(後略)

#### 4. 2 ワークシートのアンケートと振り返り記述分析

##### 4. 2. 1 ワークシートのアンケート分析

ワークシートのアンケートの結果を表4に示す。全ての項目において、X小がY小の数値を上回る結果となった。両校の数値差(X小-Y小)に着目すると、項目①は10.0、項目②は4.0、項目③は15.2となった。

次にそれぞれのアンケート項目について考察していく。項目①では、X小、Y小の両校ともに87%以上となった。このことから、多くの学習者は自分の地域への愛着を強めたと考えられる。よって、遠隔協調学習を通してシビックプライドの第1因子愛着が表出したと示唆される。

項目②では、X小とY小の両校ともに90%以上となった。このことから、今回の遠隔協調学習を通して、多くの学習者が自分の地域の宝物(特産品や製品)を外部に発信したいという願望をもったと考えられる。よって、地域の特産品や宝物を外部に発信する手段として、遠隔協調学習に有効性があると示唆される。

項目③では、項目①②に比べて極端に低く、X小とY小の数値差が最も大きくなっている。両校の学習者の自分の地域をよりよい場所にするために行動したいという願望は75%にとどまっている。ここには、これまでの学習過程や課題設定の仕方等、T1とT2による教師の働きかけの違いが少なからず影響していると推察される。よって、今回の遠隔協調学習では、シビックプライドの第4因子参画の表出には至っていないと推察される。

表4 アンケート項目において肯定的な回答をした学習者の割合(%) (n=66)

No.	項目	X小	Y小	両校
①	他の学校との交流を通して自分の地域をさらに好きになりましたか	97.1	87.1	92.1
②	他の学校との交流を通して、自分の地域の宝物(特産品や製品)を他の人たちに知ってもらいたいと思いましたか	94.3	90.3	92.3
③	他の学校との交流を通して、自分の地域をよりよい場所にするために行動したいと思いましたか	82.9	67.7	75.3

※肯定的な回答を(とてもそう思う、ややそう思う)とした

##### 4. 2. 2 振り返り記述分析

次に、振り返り記述の内容を検証するため、佐藤ら(1991)<sup>(31)</sup>、榊原・水落(2017)<sup>(32)</sup>の研究で扱われた命題を参考にしてカテゴリー分類した(次頁表5)。カテゴリーの作成と分類は、次の手順で行った。まず、分類単位や分類方法を定義する。次に、2名の分析者が定義に従って独立して分類する。最後に、分析者の分類結果を照合し、分類が異なった箇所は協議して判断した。分類は筆者と本研究者ではない現職大学院生で行った。なお、両者とも小学校免許を所持し、10年以上の教職経験をもつ。同一学習者が同カテゴリーについて複数の意見を記述したケースは複数カウントした(例：T市のことがよく分かりました/発表したり、発表を聞いたりしてとても楽しかった→「6.遠隔協調学習に肯定的」カテゴリーで2命題とカウント)。

表5 振り返り記述内容のカテゴリー数 (n=66)

No.	カテゴリー	該当例の命題	X小	Y小	両校
1	愛着	●市がもっと好きになった／ ●市はいいところだと思った	0	0	0
2	アイデンティティ	住んでいるところを知ってもらえてよかった／ 自分の市のことを伝えられてよかった	17	5	22
3	持続願望	●市は大切だと思った／●市にはいつまでも変わってほしくない ものがあると思った	0	0	0
4	参画	●市をもっとよい場所にしたい／ もっと●市の特産品をすすめたい	0	0	0
5	同期型CSCL	質問したり、会話したりできてよかった／ 写真が見れてよかった／自己紹介ができた	6	11	17
6	遠隔協調学習に 肯定的	リモート(学習)が楽しかった(うれしかった)／ いっしょに学習できてよかった／交流ができてよかった／ ●市のことを知れてよかった／	63	30	93
7	遠隔協調学習の 継続願望	またリモート(学習)をしたい／ ちがう学校してみたい	13	8	21
8	相手意識	緊張した／心配(不安)だった／学校(●市)に行ってみたい／ なかよくなれてうれしかった／友達になれた	20	9	29
-	その他・意味不明	わからない／楽しかった／うれしかった／ 用紙紛失	1	4	5

分類の結果、全8中4カテゴリーで顕著な表出が見られた。特に「6.遠隔協調学習に肯定的」において、X小がY小の2倍以上も見られており、両校の合計で最も高い数値となった。また、「7.遠隔協調学習の継続願望」、「8.相手意識」においても一定の記述量が見られることから、まちづくり学習において遠隔協調学習の有効性が推察される。

シビックプライドの4因子の中で表出が見られたのは、「2.アイデンティティ」のみであった。「自分の市のことを伝えられた」、「住んでいるところを知ってもらえてよかった」等の記述が一定量見られたことから、シビックプライドの第2因子アイデンティティが表出したと推察される。一方で、表出の見られなかった3因子に関しては、これまでの学習における教師の働きかけや課題設定、学習者の発達段階等が原因として考えられる。また、アンケート項目と同様に、各カテゴリー項目においてもX小とY小間の数値に差が見られた。ここにも、遠隔協調学習までの学習過程や課題設定の仕方等、T1とT2による教師の働きかけの違いが少なからず影響していると推察される。

表6に学習者Aの振り返り記述を示す。学習者Aは、下線⑧で自分の市の特産品についての発表、質疑応答したことを振り返り、「楽しかった」、「うれしかった」と記述している。相手校に発表し、伝えたことで満足感を得ていることが分かる。ここから、シビックプライドの第2因子アイデンティティの表出が推察される。下線⑨では、相手校との交流により、遠隔協調学習の継続願望の表出が見られる。

表6 学習者Aの振り返り記述

T市のYしょうがっこうの3年生と⑧自分の市のでき事や名物を発表するのが楽しかったし、リモートでしつもんするのが楽しかったし、うれしかったです。⑨またリモートしたり話したりしたいです。

以上をまとめると、アンケートの分析及び振り返り記述の分析から遠隔協調学習によって学習者のシビックプライドの第1因子愛着、第2因子アイデンティティが表出したと推察される。また、まちづくり学習における遠隔協調学習の有効性が推察される。

しかし、短文のカテゴリー分類によって、真に遠隔協調学習が学習者のシビックプライドの醸成に与える効果があるかという点については課題が残る。そこで、次のインタビュー調査による質的分析で変容を多面的に検証する。

#### 4. 3 インタビュー調査

##### 4. 3. 1 学習者Aのインタビュー内容

次頁表7は学習者Aに行ったインタビュー内容である。下線⑩から、学習者Aは自身の生活する自治体について興味をもち、さらに探究したいという気持ちを感じていたことが分かる。下線⑪では、遠隔協調学習による互いの発表活動を通して、自分の生活する自治体に対しての愛着を再認識し、より強めていることが分かる。これらは、表6の下線⑧の記述を裏付けるものとなっていると考えられる。加えて、下線⑫から、相手校と交流したことにより、遠隔



協調学習の継続を期待する態度の表出が見られる。

表7 学習者Aのインタビュー内容

<p>※I：インタビュアー A：学習者A          ※( )内の記述は筆者による補足説明          (前略)          I 社会の学習でS市の特産品である高原トマトを学習しました。その学習を通して、学習が終わってから、AさんはS市についてどう感じていますか。          A うーんと、うーん。<u>⑩もっとS市について調べてみたい。</u>          (中略)          I それぞれの市の特産品を発表したり、まあ宝物とかをお互いに聞いたりして、そういう交流を通して、どういうふうに思いましたか。          A いやあ、やっぱり、<u>⑪S市はいいところだなと思った。</u>          I またこのようなedutabを使った遠隔学習で、他の学校と交流する機会があったら、どう？          A <u>⑫何か楽しみで、また他の(学校の)人たちと話せるから。</u>          (後略)</p>
---

以上のことから、遠隔協調学習が学習者Aのシビックプライドの醸成に影響を与えたと考えられ、学習者Aはシビックプライドの第1因子愛着と第2因子アイデンティティが表出したと示唆される。また、遠隔協調学習を肯定的に捉えていると推察される。

#### 4. 3. 2 学習者Bのインタビュー内容

表8は学習者Bに行ったインタビュー内容である。下線⑬⑭から、学習者Bは自分たちの地域の宝物をX小へ伝えられたことにより、満足感を得ている様子が分かる。また、下線⑮⑯から、相手校との交流活動を肯定的に捉えている態度の表出が見られる。

以上のことから遠隔協調学習が学習者Bのシビックプライドの醸成に影響を与えたと考えられ、学習者Bはシビックプライドの第2因子アイデンティティが表出したと推察される。また、遠隔協調学習を肯定的に捉えていると推察される。

表8 学習者Bのインタビュー内容

<p>※I：インタビュアー B：学習者B          ※( )内の記述は筆者による補足説明          I まず、んーと、自分たちの発表、(T市の地名)隕石についての発表をしましたが、その発表について、どう感じますか。          B <u>⑬X小学校のみんなにT市のことを知ってもらえて…。</u>          I 知ってもらえてどうだったの？          B <u>⑭うれしかった。</u>          (中略)          I 今回、他の小学校の友達とオンラインで交流したんだけど、その学習はどうでしたか？          B <u>⑮楽しかった。</u>          I 楽しかった？どういうところが楽しかったんですか。ちょっと詳しく教えてもらっていい？          B <u>⑯他の小学校の人といっぱい話ができて…、友達になれた。</u>          (後略)</p>
--

学習者A、Bのインタビュー内容から、どちらにも共通してシビックプライドの第2因子アイデンティティの表出が見られた。また、遠隔協調学習に肯定的な態度の表出が見られた。上位群である学習者Aは、シビックプライドの醸成に関して具体的な心情(表7下線⑩⑪)が発話に表れていた。一方で、学習者Bは遠隔協調学習の効果を感じていたものの、インタビュー全体を通して「うれしかった」、「楽しかった」という表面的な言葉のみの表出が目立ち、具体性に欠ける感想であった。このことから、上位群の場合は質的な側面でもシビックプライドが醸成したことが示唆される。



## 5 成果と課題

### 5.1 成果

分析の結果、本研究では以下の3つの成果が得られた。

1つ目に、プロトコル分析から、遠隔協調学習によってシビックプライドの第2因子アイデンティティの表出が推察された。また、対話的な学びにおける遠隔協調学習の有効性が推察された。

2つ目に、ワークシートのアンケートと振り返り記述による分析から、シビックプライドの第1因子愛着と第2因子アイデンティティの表出が見られた。また、地域の特産品や宝物を外部に発信する手段として、遠隔協調学習の有効性が推察された。

3つ目に、インタビュー調査による分析から、シビックプライドの第2因子アイデンティティの表出が推察された。また、遠隔協調学習に肯定的な態度の表出が見られた。

以上のことから、小学校社会科まちづくり学習において遠隔協調学習を用いた単元開発・授業実践により、遠隔協調学習がシビックプライドを醸成させる要素として有効であることが明らかとなった。しかし、シビックプライドは幾多の教育活動・実践によって醸成されていくものである。本研究の有用性を認識するとともに、有用性のある取組を継続的・反復的に実践することによって、シビックプライドを醸成していくことができると考える。

### 5.2 今後の課題

今後の課題として、以下の2つを挙げる。

1つ目は、ワークシートのアンケート分析と振り返り記述分析からこれまでの学習過程や課題設定の仕方等、T1とT2による教師の働きかけの違いが少なからず影響していることである。

2つ目は、シビックプライドを醸成するためには、継続的な教育活動と教師の働きかけや発問が求められることである。本研究では、シビックプライドの第3因子持続願望、第4因子参画の表出は見られなかった。よりシビックプライドの醸成に深まりのある実践とするには、第三者からの質問や問いかけ→課題の設定→探究活動といった一連のサイクルの確立、単元開発・授業実践の改善が必要であると考えられる。

## 引用及び参考文献

- (1)日本創成会議・人口減少問題検討分科会：「成長を続ける21世紀のために『ストップ少子化・地方元気戦略』」, 2014, <http://www.policycouncil.jp/pdf/prop03/prop03.pdf>. (2023.7.28閲覧)
- (2)中央教育審議会：「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について(答申)」, 2015, [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2016/01/05/1365791\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/01/05/1365791_1.pdf). (2023.7.28閲覧)
- (3)中央教育審議会：「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)【本文】」, 2021, [https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt\\_syoto02-000012321\\_2-4.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf). (2023.7.28閲覧)
- (4)大西宏治：「日本地誌学習の新たな方向性：IGU憲章とふるさと学習」, 『地理』, 67巻9号, pp.31-37, 古今書院, 2022.
- (5)文部科学省：『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 社会編』, p.10, 東洋館出版社, 2017.
- (6)竹内裕一：「まちづくり学習において地域問題を教材化することの意義」, 千葉大学教育学部研究紀要, 第52巻, pp.57-67, 千葉大学教育学部, 2004.
- (7)寺本潔：「まちづくり学習」, 日本社会科教育学会編『社会科教育事典』, pp.114-115, ぎょうせい, 2012.
- (8)前掲書(6), pp.57-67.
- (9)太田満：「小学校社会科まちづくり学習の授業開発—人口減少社会を生き抜く資質・能力の育成に着目して—」, 共栄大学教育学部研究紀要, 第2号, pp.83-94, 共栄大学, 2018.
- (10)吉水裕也・佐藤克士・澁谷友和・曾川剛志：「社会科におけるまちづくり学習の研究動向と展望」, 兵庫教育大学研究紀要, 第55巻, pp.1-10, 兵庫教育大学, 2019.
- (11)大西宏治：「時間軸・空間軸からアプローチする『まちづくり』—教材づくりへの活かし方」, 『社会科教育』, 56巻6号, pp.18-21, 明治図書出版, 2019.
- (12)長瀬拓也：『社会科でまちを育てる』, 東洋館出版社, 2021.
- (13)伊藤香織・紫牟田伸子：『シビックプライド—都市のコミュニケーションをデザインする—』, シビックプライド研究会, p.164, 宣伝会議, 2008.

- (14)前掲書(13), p.164.
- (15)田中尚人・堀尾和美:「小学校地域学習におけるシビックプライド涵養に関する実践的研究」, 実践政策学, 第2巻, 第1号, pp.107-113, 実践政策学エディトリアルボード, 2016.
- (16)伊藤香織:「都市環境はいかにシビックプライドを高めるか—今治市を事例とした実証分析—」, 都市計画論文集, 第52巻, 第3号, pp.1268-1275, 公益社団法人日本都市計画学会, 2017.
- (17)前掲書(15), pp.107-113.
- (18)井形康太郎・田中尚人:「地域学習における児童のシビックプライド形成に関する研究」, 土木学会論文集D3(土木計画学), 第75巻, 第5号, pp.L181-L189, 公益社団法人土木学会, 2019.
- (19)山田均:「シビックプライドを醸成することの可能性について」, 奈良学園大学紀要, 第12巻, pp.125-134, 奈良学園大学, 2020.
- (20)唐木清志:『「公民的資質」とは何か』, pp.36-37, 東洋館出版社, 2016.
- (21)文部科学省:「遠隔教育推進に向けた施策方針」, 2018,  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/zyouhou/detail/\\_icsFiles/afiedfile/2018/09/14/1409323\\_1\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/detail/_icsFiles/afiedfile/2018/09/14/1409323_1_1.pdf). (2023.7.28 閲覧)
- (22)新井堅登・榊原範久・大前佑斗:「小規模学級における相互閲覧を取り入れた遠隔協調学習に関する事例的研究」, 日本教育工学会論文誌, 第45巻, Suppl号, pp.53-56, 日本教育工学会, 2021.
- (23)八代一浩・水落芳明・高橋弘毅・水越一貴・大島崇行・榊原範久・古屋達朗・大前佑斗:「人工知能が支援する遠隔協調学習システム(Intelligent edutab)の開発」, 情報処理シンポジウム論文集, pp.24-29, 情報処理学会, 2019.
- (24)前掲書(23), pp.24-29.
- (25)辻翔太・榊原範久・八代一浩・水越一貴:「同期型CSCLを活用した遠隔協調学習が探究のプロセスに与える効果の検証—ふるさと学習の『まとめ・表現』場面を中心に—」, 上越教育大学教職大学院研究紀要, 第9巻, pp.73-81, 上越教育大学, 2022.
- (26)前掲書(23), pp.24-29.
- (27)前掲書(22), pp.53-56.
- (28)前掲書(5), p.136.
- (29)前掲書(5), p.8.
- (30)前掲書(16), pp.1268-1275.
- (31)佐藤学・岩川直樹・秋田喜代美:「教師の実践的思考様式に関する研究(1)—熟練教師と初任教師のモニタリングの比較を中心に—」, 東京大学教育学部紀要, 第30巻, pp.177-198, 東京大学教育学部, 1991.
- (32)榊原範久・水落芳明:「小学校社会科における批判的思考態度の醸成に関する事例的研究—四面思考シートを用いた教育実践と評価—」, 日本教科教育学会誌, 第40巻, 第3号, pp.13-23, 日本教科教育学会, 2017.

# Case Study to Improve Civic Pride in Social Studies Community Development Learning at Elementary Schools —Practice and Verification with Using Remote Collaborative Learning—

Kota KATAGIRI\* · Norihisa SAKAKIBARA\*\*

## ABSTRACT

The field of education has, in recent years, seen a demand for classroom practices that make the most of local resources and issues to revitalize the local community. To meet this demand, it is essential for students to perceive the attractions and issues of their immediate neighborhoods as relating to them own personally matters and to foster civic pride to make them feel attached to their local communities.

We focused on community development learning and remote cooperative learning in elementary school social studies. We developed a unit using remote cooperative learning and conducted practice lessons in elementary school social studies community planning classes, to verify the effects of remote cooperative learning on the cultivation of civic pride. The results showed that the first factor of civic pride, attachment, and the second factor, identity, were expressed, and distance cooperative learning was effective in fostering civic pride.